

聖書：Ⅱサムエル 12：1～14

説教題：ダビデの罪の告白

日時：2018年7月8日（夕拝）

ダビデは前の11章で大変な罪を犯しました。時はアンモン人との戦いの最中。兵士たちが戦場で戦っている間、ダビデは王宮の屋上を歩いていて、一人の女が体を洗っている姿が目に入り、彼女が部下の兵士の妻と知っても召し入れ、姦淫の罪を犯しました。さらに彼女が子を宿したと告げると、ダビデは自分の子であることを隠すため、色々な工作をしますが、うまく行かず、ついに邪魔になったその夫ウリヤを戦場の最前線に出させて戦死させます。そんな11章の最後には短くも恐ろしい言葉がありました。それは「しかし、ダビデが行ったことは主のみこころを損なった」という一文です。ダビデは王の権力を使って自分の罪を隠蔽することに成功しました。すべては人間の目にはうまくおさまったかのようにでした。しかし主は一切をご覧になっていて、それは主の目に悪だったと言われていました。従って主はこれを放置されません。主がダビデを取り扱って行かれる様子が、この12章に記されています。

主は預言者ナタンをダビデに遣わし、ナタンは一つのたとえ話を語ります。内容は先ほどお読みした通りです。ある町に二人の人がいた。一人は富んでいる人で、もう一人は貧しい人だった。富んでいる人はとても多くの羊と牛の群れを持っていましたが、貧しい人は自分で買って来た一匹の小さな雌の子羊しか持っていませんでした。その羊は彼にとってたった一人の大事な娘のようでした。ところがある時、富んでいる人のところに旅人が来ると、彼は自分のものから調理するのを惜しみ、貧しい人の雌の子羊を取り上げて、それを調理しました。ここまで聞いた時、ダビデは我慢できなくなり、その男に対して激し怒りを燃やして、こう言いました。「主は生きておられる。そんなことをした男は死に値する。その男は、あわれみの心もなく、そんなことをしたのだから、その雌の子羊を四倍にして償わなければならない。」これは旧約聖書の規定に従ったものでした。出エジプト記22章1節に、こういうケースでは「4倍にして償うべきこと」が命じられていました。そういう意味でダビデは正しく判断したのです。

ところがでした。ダビデがこの言葉を語った瞬間、それを待っていたかのようにナタンの厳しい言葉がダビデに向かって発されます。「あなたがその男です！」と。この話はあなたの話です！あなたは自分がそれと同じことをやったことに気がつかないので

すか？これはあなたのことを描いた話であることが分からなかったのですか、と。私たちは人の罪や過ちは良く見えますが、自分のことはさっぱり見えないものです。思い出すのは私の小さい頃の話です。私の家はクリスチャンホームだったので、小さい頃から食事の時はみんなで祈りしてから食べました。私たち兄弟は——私には弟と妹がいますが——たまにお祈りの時、他の人が目を開けていないか、ひそかにチェックするのです。そして祈りが終わった瞬間に言います。「今、お祈りの時、だれとだれとが目を開けていたよ！」と。すると父が言います。「どうしてお前にそれが分かるのか」と。人の間違いとか罪を指摘して得意になりながら、実は自分がそれと同じことをしているということにはさっぱり思いが至らない。これは子どもの話ですから笑えますが、私たちも似たようなことをしているのではないのでしょうか。

続くナタンの言葉が示していることは、ここで問題にされているのは「神への罪」ということです。ナタンはまず神がダビデにどんなに良くしてくださったかを述べます。そして9節で「どうして、あなたは主のことばを蔑み、わたしの目に悪であることを行ったのか」と言っています。ダビデが実際にしたことは、ウリヤを殺害し、その妻を略奪したことで、ここでそのことが神のことばを蔑んだ罪として告発されています。さらに10節では、あなたは「わたしを蔑んだ」とまで言われています。聖書はこのように、罪とは何よりも「神に対するもの」と述べています。参考になる言葉として創世記の後半にヨセフという人が出て来ますが、彼がポティファルという人の奥さんに誘惑された時、それを拒否する場面が出て来ます。その際、彼はご主人様の奥様には決して手を出せないと言いましたが、その最後にこう言います。「どうして、そのような大きな悪事をして、神に対して罪を犯すことができるのでしょうか。」それは直接的には彼の主人ポティファルに対する罪であり、またその妻に対する罪でもあります。それ以上にそれは神に罪を犯すことだとヨセフは言っています。またルカの福音書15章の放蕩息子のたとえでも、放蕩息子は悔い改めた時、「お父さん。私は天に対して罪を犯し、あなたの前に罪ある者です。」と述べ、まず第一にこの罪は神に対するものだと告白しています。

私たちにいのちを与え、今日も生かしてくださっているのは神様です。また食べ物を与え、着るものを与え、住むところを与え、家族・友人・知人を与え、その生活を守り支えてくださっているのも、他のどんな人以上に神様です。そして主なる神は私たちをご自身のかたちにお造りになり、ご自身にならって正しい道に歩むようにと命じていま

す。そのことは私たちの良心に刻まれていますので、私たちは生まれながらにして何が正しく、何が悪かの感覚を持っていますし、また聖書を通してはっきり神のみこころを示されています。この神の前にある者として、何よりもこの神に対して私はどう歩んだかということが実は私たちにとっては最も大事なことであり、また必ず最後には問われることなのだと言っています。そのダビデに厳しい宣告が語られています。10～12 節ではダビデがウリヤを殺害したようにダビデの家から剣はいつまでも離れないこと、またダビデが他人の妻を奪ったようにダビデも今後、同じような目に会わされるということが述べられています。

さて、このようにダビデの罪が責められる厳しい内容が書いてある 12 章ですが、ここには同時に素晴らしい福音のメッセージが含まれています。何とこのダビデが神に赦されるということが記されて行きます。13 節にそのことが凝縮して語られています。ここに 2 つのメッセージを見ることができると思います。一つ目はダビデの悔い改めについてです。彼は 13 節でこう言いました。「私は主の前に罪ある者です。」 この告白を受けて、預言者ナタンは「主も、あなたの罪を取り去ってくださった。」と言います。私たちはここを読んでどう感じるでしょうか。ダビデの悔い改めの言葉があまりに短い。これで赦されるなんて簡単過ぎやしないか。これは神がダビデをえこひいきしているからなのか。しかしそういうことではありません。むしろこれは悔い改めの素晴らしい模範です。参考になるのはルカの福音書 18 章に記されているパリサイ人と取税人の祈りのたとえです。あのたとえで後から出て来る取税人の方が神に義と認められて家に帰ったと記されていますが、あの彼は何と祈ったでしょう。彼の祈りはこうでした。「神様、罪人の私をあわれんでください。」 たったこれだけです。この取税人は目を天に向けようとしませんでした。心ではしっかり神を見ていて、その神の前に言える言葉をこれ以外には持たなかったのです。これが精一杯。しかしこの短さの中にかえって彼の心が真に砕かれていることが示されていました。ダビデも同じです。比較して良いと思われるのは、ダビデの前の王のサウルです。彼は預言者サムエルに罪を責められた時に色々言い訳をしました。いかにそうするより他なかったかを弁解し、言い抜けようと思いました。そして人前での面目を何よりも気にしました。この時のダビデも非常に難しい状況にあったと思います。ここで王が自分の罪を認めたらメンツは完全につぶれてしまいます。取り返しのない恥を受けてしまいます。他の王たちの中には預言者たちの言葉を受け入れず、彼らを殺したり、追放する人もいました。しようと思えばダビデもそうできます。しかし彼は一切自己弁護せず、暴露された罪をその通りに認め、次にナ

タンからどのような言葉が語られようとも、それを受け止めようとへりくだりました。こう考えるとこのダビデの自分の罪を認める短い告白は、一見簡単なようで、実は私たちがなかなかできない告白、私たちが大いに見習うべき告白であることが見えて来るのではないのでしょうか。

そして 13 節から学ぶ 2 つ目のことは、神のすぐ様の赦しです。ダビデの告白の短さにも私たちは驚きますが、それに続く主の赦しも早過ぎる！神はこんな簡単に赦すのか？と私たちの頭は混乱しそうになります。しかしここにあるメッセージは神はいかに進んで私たちを赦してくださるかということです。詩篇 32 篇はダビデがまさにこの罪を赦された時の経験を歌ったものです。その 1~2 節には、そのそむきの罪を赦され、罪を覆われた人は何と幸いか！と歌われています。そして注目したいのは 5 節です。ダビデは罪を告白しないことから来る苦しい状態を経験していましたが、ついに導かれて、「私の背きを主に告白しよう」と決心します。すると 5 節の最後に「するとあなたは私の罪のとがめを赦してくださいました」と記されています。これはダビデが主に「私の罪を告白しよう！」と決心し、それを主に言い始めた瞬間のことです。その瞬間に、主はもう赦しの恵みを与えてくださった。ダビデの心に平安を与えてくださった。つまり神はこのように、私たちが悔い改める時、進んで赦してくださいる方であるということです。そのことはあの放蕩息子のたとえにおいてもそうです。放蕩息子が落ちぶれて悔い改めて帰って来ると、お父さんの方から走り寄って、息子を抱きしめ受け入れます。そして息子が悔い改めの言葉を語り始めますが、その全部は言わせません。むしろその言葉をさえぎるようにして、「さあ、死んでいた息子が帰って来たのだから、肥えた子牛をほふって、食べて、祝おうではないか！」と言います。神はそのように進んで赦してくださいる方であることが、今日の箇所 13 節にも示されています。

そしてここで「主はあなたの罪を取り去った」と言われています。すなわち主はダビデの告白を受けて、ご自身とダビデとの間にあった罪を取り除いてくださった。そこにもはやそれがない状態された。イザヤ書 38 章 17 節：「あなたは私のすべての罪を、あなたのうしろに投げやられました。」 ミカ書 7 章 19 節：「もう一度、私たちをあわれみ、私たちの咎を踏みつけて、すべての罪を海の深みに投げ込んでください。」 私が罪を認め、告白するなら、主はその罪を後ろに投げやってください、後ろの海の深い底に沈めてくださる。それによって私を見る時、全くその罪がない者として見てくださる。私は神との関係を妨げていた障害を取り除かれ、神との間に雲一つない青空の状態をい

ただいた者として、心に励ましを受け、喜びを受け、神より頼みながら、神とともに歩む生活へと再出発して行くことができるのです。これは何と素晴らしい祝福でしょうか。

しかし 14 節はどう考えたら良いのでしょうか。14 節：「しかし、あなたはこのことによって、主の敵に大いに侮りの心を起こさせたので、あなたに生まれる息子は必ず死ぬ。」　ダビデは赦されたのに、このような報いはなお受けなければならないのでしょうか。答えは、このあと見て行きますようにキャンセルされません。このことは罪を赦されたら苦しいことは何もなくなるということにはならないことを私たちに教えてくれます。罪を赦されても、それをしたことによる苦しみは残るのです。しかしそれは罪の支払いという意味での罰ではなく、ダビデに益をもたらすための神の訓練と言えます。もし罪を告白して赦されたと言って、苦い経験も少しも味わわなかったのでしょうか。私たちは罪の赦しを何か安っぽいものに考えてしまうと思います。罪を犯しても、どうせまた告白すれば良いと考えて、自分の歩みに無頓着になるかもしれません。神は私たちをそのようにはダメにされないのです。ダビデがこのような懲らしめを受けたのは、自分が犯した罪がいかに重大なものであったのかを、自分の身を通していくらかでも感じるためです。そしてこれからの自分の歩みに注意深くなるためです。これはこのような懲らしめによって私たちが聖めて行ったださる神の愛による訓練なのです。

さて私たちはどうでしょうか。私たちは何よりも神に対して生きている者です。神は私たちの歩みのすべてを見ておられます。そのお方の前での私たちの歩みはどのようなものでしょう。神との関係を妨げている罪をそのままにしていることはないでしょうか。しかし今日の箇所が語る福音は、私たちが自分の罪を正直に認めて神の前で告白するならば、神はそれを赦して下さるということです。そこにあった罪を取り去って下さるということです。たとえその罪がダビデのような大変な罪であったとしても、そうです。ですから私たちは勇気をいただいて、自分の示されている罪を自己弁護なしに主に申し上げたいと思います。主の前に隠すことをやめ、みじめな自分をそのままさらけ出し、あわれみを請うなら、主があなたの罪を取り除いて下さる。その罪を取り去って、後ろに投げ、深い海に沈めて下さる。そして神はご自身との新しい関係、親しく近く歩む関係に導いてくださいます。私たちはこの恵みをいただいて、たとえ懲らしめが与えられるとしても、神が愛によって導いて下さる祝福の人生へと立ち返らせていただきたいのです。